

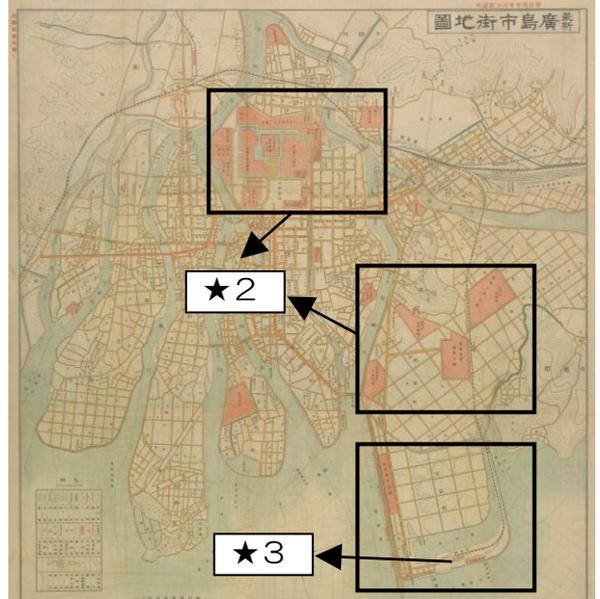
授業で使える当館所蔵地図

No. 49 地図1『御城下絵図（広島）』、地図2『最新大広島市街地図』、地図3『1：25,000地形図広島の一部』
 作成年：地図1：江戸時代、地図2：1926（大正15）年、地図3：2013（平成25）年
 サイズ：地図1：105×86cm 地図2：79×54cm 地図3：41.92×51.14cm（原本）
 作者：地図1：不明 地図2：大淵善吉 地図3：国土地理院

地図1『御城下絵図（広島）』



地図2『最新大広島市街地図』



地図3『1：25,000地形図広島（広島10号一2）の一部』



【解説】

これらの地図は、広島城を中心に江戸時代の城下町・近現代の市街地を描いたものである。

地図1は江戸時代に作製された地図で、広島藩の城下町の土地利用について記されている。特に、緑色で描かれている場所は「新開田畑」とあり、現在の広島市の大部分が江戸時代に新たに土地が造成されたことがわかる。

地図2は、大正時代に作製された地図で、広島市の土地利用を読み取ることができる。特に、赤色で描かれている場所は、「官公署」とあり、広島城を中心に集中していることが分かる。

地図3は、現在の広島市を1:25000で表した地形図である。この地図もどのような土地利用がなされているのかを読み取ることができる。地図1・2と比較することで、江戸時代から現代に至る広島市の土地利用の変化を知ることができる。

*この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図を複製したものである。
 （承認番号 平30情複 第1644号）

★1 新開田畑

広島藩は、17世紀頃より、人口が増加し、新開奉行を新設し、藩営事業として、莫大な経費や労力を用いて大規模な干拓新開を企画した。古川村、蟹屋新開、尾長村、皆実新開、舟入新開、江波新開、吉島新開など21が元禄（1688～1703）年代までに干拓されている。中でも、元和（1615～1623）年代から正徳（1711～1715）年代までの一世紀あまりで新開総高2万石が干拓されている。そして、1664（寛文4）年までの近世初期の頃には、約80%の新開田畑が造成された。

★2 官公署

地図の赤の箇所には、「旧大本営跡第五師團司令部」「歩兵第十一聯隊」「野砲兵第五聯隊」「廣島陸軍兵器支廠」「廣島陸軍被服支廠」「重砲兵第四聯隊」「廣島湾要塞司令部」「廣島兵器支廠」などが記されている。このことから、広島を中心部が軍都であったことがうかがえる。

広島軍都としての発展は明治維新に遡る。明治維新の兵制改革として東京・大阪・鎮西・東北の4つが重視され、1873（明治6）年には全国を6つの軍管に分けた。その際、広島に第5軍管広島鎮台が設置され、中国・四国地方の大部分を管轄することになった。

近代日本の初めての対外戦争であった日清戦争において、広島が陸軍派兵、兵站基地としての重要性が明確になった。東京とつながる広島駅、そしてその広島駅と宇品港が明治22年に結ばれた。そして、大本営が設営され、明治天皇が移り、帝国議会が開かれたことで、広島は実質的に臨時首都となったといえる。日清戦争後も宇品港は軍用港として役割を担った。また、北清事変や日露戦争でも出撃拠点となった。

★3 宇品港と宇品新開

宇品港は、県令千田貞暁が築港に尽力した。千田が県令として赴任した当初は本格的な港がないことや士族の失業救済事業が課題となっており、その救済事業として宇品新開（干拓）と港が築かれた。沿岸住民の反対を千田が説得し、工事が始められたが、悪天候で堤防が壊れたり、人件費、材料費が値上がりしたりするなど困難に見舞われた。そして、工費は当初予算の3倍（30万142円73銭8厘）、年月は5年3か月を費やして完成した。開港当初は、「無用の事業」「一大失策」とも言われたが、日清戦争で高く評価され、「国家有益の事業」とされた。

【用語について】

・千田貞暁（せんだ さだあき）

千田貞暁は、薩摩藩の武士の子として生まれた。戊辰戦争に従軍し、明治維新後は新政府の設立にかかわった。1880（明治13）年に広島県令に就任、1944（明治19）年には同県の県知事に就任した。在任中に宇品港築港に着手し、完成させた。しかし、工事が遅れたことを理由に処分を受けて、新潟に転任となった。以後、和歌山、愛知、京都、宮崎の知事を歴任し、晩年は貴族院議員に就任し活躍した。

広島市には千田公園がある。その公園の一角にはフロックコートを着て、広島湾を見つめる千田貞暁の銅像が立っている。その右手に握られているのが、千田が建設に大きくかかわった宇品港の設計図である。

【利用の例】（中学校社会科歴史的分野「産業の発達と町人文化」、中学校社会科地理的分野「日本の諸地域～中国・四国地方～」で活用できる）

○江戸時代の新開（干拓）を知ることができる。

→地図の緑色の箇所（地図1）と現在の広島の地図（地図3）を比較することで、現在の広島市の大部分が江戸時代の新開（干拓）によってできた土地であることを地名で確認することができる。

○地図2から当時の広島の特徴を読み取ることができる。

→地図の赤色の箇所（地図2）は、「旧大本営跡第五師團司令部」「歩兵第十一聯隊」などの軍都関係する官公署が多いことを読み取ることができる。このことから、広島が軍都として栄えていたことが分かる。

→「かきの養殖」について明記がある。広島県は現在でもかきの養殖が盛んであり、このころからすでに行われていたことを「歴史」の視点から読み取ることができる。広島湾は、湾に山が迫り、沖合を島々が仕切っているため、波が静かで植物プランクトンが多いという「地形」の視点からも読み取ることができる。

○地図3から現在の広島の特徴を読み取ることができる。

→宇品の西側に新しい埋め立て地ができていたことを読み取ることができる。また、地図記号からその土地が工業に活用されていることが分かる。

→地図2と比較すると川の本数が減少していることを読み取ることができる。当時は、猿猴川、京橋川、元安川、本川、天満川、福島川、山手川の7本流れていた。この福島川と山手川を治水のために埋め立て、開削して1本の大きな川（放水路）につくりかえたことが分かる。

○地図1から地図3を使用することで、変化を読み取ることができる。

→共通する地名を基に、変化を読み取ることによって現在の広島市の変遷の詳細を理解することができる。

→現在の広島が成り立つまでに、少しずつ土地が干拓、埋め立てされていることを理解することができる。

【参考文献】

- 広島県、広島市ホームページ
- 土井作治（2015年）『広島藩』吉川弘文館
- 松井輝昭・池田明子（2004年）『広島県の不思議辞典』新人物往来社
- 空辰男（1994年）『加害基地宇品』汐文社